（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　岩井　亮雄

本論文は，過去 100 年の間における韓国語の母音の変遷を，方言資料や実験音声学など多くの材料と手段を駆使して総合的に考察したものである。韓国語の母音体系は過去数十年の間においても変化の途上にあり，また方言間でも体系が異なっていることが知られている。本論文はそうした問題を，20 世紀前半の段階まで遡ってそこから現代に向けて，各地域でどのように変化したかを明らかにしようとするものである。

本論文の特色は，扱われている資料と研究方法の多彩さにある。方言資料に関しては，20 世紀前半の資料に加えて，20 世紀後半に主に韓国で行なわれた各種の方言調査資料を比較している。また実験音声学的研究に関しても，本論文の著者が自ら行なった現代語に関する研究の他に, 20 世紀後半に行なわれたさまざまな実験音声学的研究を比較し, さらに, 母音体系の異なる方言話者の間で，母音の聴取にどのような違いが見られるかを観察するなど，さまざまな方法を駆使している。その結果，従来の研究とは異なる興味深い考察が行なわれている。

第１章の序論では，研究目的，研究方法，研究資料の紹介，用語の解説など行ない，引き続いて，第２章では 20 世紀前半に小倉進平によって収集された方言資料に基づいてこの時期の母音体系とその地域差を扱っている。これはこの論文のいわば出発点をなすもので，その中で，問題となる母音が含まれる語形を抜き出してその地域差を取り出し，さらにそれを言語地図化して可視化することにより，分布の特徴を分かりやすくまとめている。また，そこで得られた知見が，この時期の母音に関する先行研究で推定されていた事柄と合致するか否かの検証が行なわれている。

次章以降では，先行研究の中で，未解決の問題として残されていたさまざまな個別の問題を扱っている。まず，第３章では，中世語，近代語ではもともとㅚ /oj/ とㅟ /uj/ という二重母音であったものが現代語においてはさまざまに変化しているが，異なる時期の方言調査資料を比較することにより，変化の方向性を論じ，その結果，地域ごとに異なった方向に変化していることを明らかにした。続く第４章では，母音ㅔ /e/ とㅐ/ɛ/ の音韻的対立の消長，ㅗ /o/ と ㅜ /u/ の接近という，他の研究者によってもしばしば論じられる課題に対して，自身による実験結果と，時代の異なる他の研究者による実験結果を比較して，変化の方向性に関して新たな結論を導きだしている。さらに，これらの母音の音韻的対立が明瞭でない地域の話者の発音を，それが明瞭な地域の話者がどのように聴取するかという実験を行ない，そこからも変化がどのように起きているのかについて新しい結論が導き出されている。

本論文については，若干表現が分かりにくい点など改善すべき点も見られるが，何よりも 20 世紀以降の韓国語の母音の変遷をこれまでにない幅広い資料と方法を用いて明らかにした点は大きな功績と考えられる。よって，本審査委員会は，本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。